随筆

丸沢常哉先生言行録

廣　田　鋼　蔵*

現在，大阪大学工学部の方々は，丸沢常哉先生と言われても，多分ご存じなかろう．ご存じでも恐らく，終戦時に満鉄中央試験所の所長として，同所を円滑に，しかも完全にソ連，ついで中国へ引渡す使命をやり遂げた人．さらに徴用に応じて卒先残留した学者．そして幾多の辛酸を嘗め，昭和30年最後の旧所員と共に帰国した人物．こんな経歴の持主として，脳裏に残っていることだろう．これに対し，古希を過ぎた方ならば，丸沢とは大正の中頃，万有還銀術事件関与に責任を感じ，九大教授を退職した学者．こんな記憶が甦るかも知れない．

だが，実を言えば，先生は大阪大学に，特に工学部に縁のある方であった．というのは，先生は昭和４年に，同学部前身の大阪工業大学の教授に任ぜられ，応用化学教室を創設．昭和８年７月からは，４月に大阪帝国大学工学部へ改編されたばかりの，第二代工学部長に就任．以後２年間勤務の後，同12年に満鉄に招聘されて教授辞任，それ迄の功績により阪大名誉教授の称号を与えられた人である．

さて，このような経歴の丸沢先生（1883～1962）が，明治大正期の科学者らしい，筋の通った国家観と強い責任感を抱く学者であったことを，ここにご紹介申し上げたい．ところで，これを敢てする理由を述べよう．筆者は，満鉄在職中から戦後へかけて，先生に接する機会を得て，いろいろご指導を頂いた．しかも戦後，はからずも，阪大勤務となった．こんな事情から，最近余暇に先生の足跡を調べてきた．その成果は，すでに『万有還銀術事件について』と題し発表し[1]，さらに『先生の大正デモクラシー期の活躍』と題し，九大在職中の先生の足跡を発表中である[2]．だが，これ以外に書き残したい先生の逸話が沢山ある．その中で信頼性が高いと思われる話を中心に，先生の言行録と題し，代表的逸話をまとめてみた．

*廣田鋼蔵（Kozo HIROTA），理学部，大阪大学名誉教授・日大大学院講師，理学博士

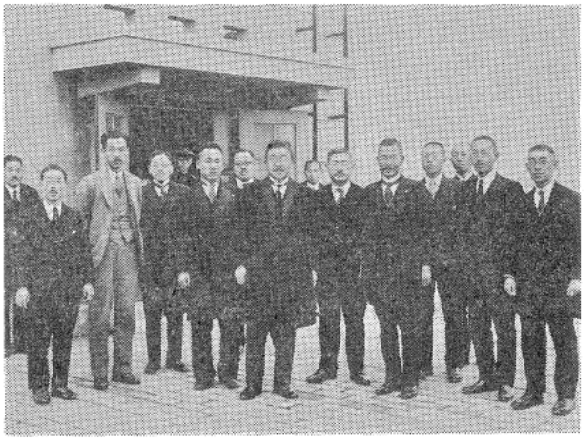

図１　阪大教授時代の先生（右から５番目）最前列中央左隣は鳩山一郎文相　昭和６年12月29日

なお，先生は終戦後10年も中国に留用され，その間に朝鮮戦争と人民裁判闘争があり，精神的肉体的に大変な辛苦をなめられた．それについては，遺書『新中国生活十年の思ひ出』（1961）（非売品）と『新中国建設と満鉄中央試験所』（1981）（二月社）とがある[3]．興味ある方はこれらを参照されたい．

§１．満鉄でのご功績

満鉄中央試験所と云えば，今でこそ広くその名が知られる．だが以前は限られた範囲の化学者にしか知られていなかった．長年同所に勤務の事務関係者によると，昭和初期まで同所に入社の問い合せがよく来た．多分，採用試験の実施場と感ちがいされていた，という[4]．こんな評判の同所長に先生は昭和12年正式就任．その折，二足のわらじは履かぬと言われた通り，阪大を退官された．そして全国の大学をまわり多数の人材を集め，また所員には業績があがるように指導された．一応の成果が上り，就任の目的を果した先生は，昭和15年秋所長を佐藤正典

博士にゆずり，一時帰国された．

だが，太平洋戦争がたけなわの昭和18年，先生は再び副総裁待遇顧問として，新京（現，長春）にあって満州の化学工業問題を総括された．その後，戦況がわが国にさらに不利となった昭和20年5～6月に，中央試験所長に再就任．そして間もなく終戦となったが，同所の“赤穂城明け渡し”と称される見事な措置をとられた．その結果，今や同所は化学物理学研究所に拡充発展され，新中国のこの分野の最高研究機関となった．そしてわが国の研究者も招待され，日中友交の場となっている．

もちろん，そうなるまでの終戦から引揚までの十年間，先生ばかりか残留旧所員は苦難の連続だった．だが，その間に旧所員は一人として，ソ連中国側に不当な処置を受ける者はなかった．これは全て先生の先方への折衝の適切さと，旧所員への指導の妥当さがあった，といえる．またそれを可能とする有能なスタッフ起用の明があったのも，一因だった．これに対し先生の指導方針に従わず所を去り，自ら苦難に陥った有名な燃料化学者Aその他の何人かの所員がいた．これも事実である．だが，将来請求される賠償金の一部として満鉄を戦勝国に引き渡すとの，先生の方針は，正しかった．日中友好の気運のたかまる現在，いよいよこの感を深くし，先生の優れた見通しを評価したい．

先生は，戦後に同所の管理が中国・ソ連側に移っても，実質上の顧問の役を果していられた．だが，暇もできたので，筆者なども居室に参上して，親しく何かと世間話も含め，うかがうことができた．本稿にはその一部が含まれている．

§2．人を信ずるご性格

先生の性格と言えば，誰でも先生が人を信じ易い点を挙げよう．その好例が，羽鳥翁の万有還銀術事件への関与である．この“技術”は，翁の助手が燃料木炭に硝酸銀溶液を浸し，試金操作中に炉内試料に蒸気として銀を混入させるインチキ，と先生が看破した．だが，一年半余もこれに気付かなかったのは，先生が翁の人柄の良さを信用したため，と戦後も語っていられた．引揚てから本事件直後の東京朝日新聞を調べてみると，助手はこれを羽鳥翁の教示だと告白している．この記載は先生にお確かめしたい点だが，すでに逝去されていた．

つぎに同じく九大教授時代の話に，講義された分析化学の内容をそのままこっそり本にされた件がある．自著としたその教室員（M氏？）は，もちろん叱られたが，処罰までに至らなかった，とのこと．

このような騙されの前例がいくつもあるので，戦後の中国・ソ連側との折衝には，先生を助けた人達は大変に気を使った，と聞いた．その反面，先生の人柄が先方からの信頼を得たのも事実であろう．つぎに，この点に関連し，またソ連を知る上に重要な事実を書き残しておく．

終戦後の未だ正式管理がソ連側に移っていないある日，ソ連将校がやってきた．そして曰は，高価なので盗難の恐れがあるから，白金器具は保管する，という．そこで分析用として2～3個のルツボを残し，約100個近くの白金製品（計約1kg）を持ち去った．その折ソ連生活も長くロシヤ語も達者なO総務課長が立会い，彼のサイン入りの正式の預り証をとっておいた．果して正式引渡しの折，白金製品の行方が問題となった．ソ連側はそんな将校は知らぬという．だが，預り証は正式と認めて先生には何のおとがめはなかった．恐らくこの事件は高価な戦利品を得た，あの将校の功績になったことだろう．それだけ，終局的には満鉄を引きついだ中国側の損失となった，といえる．

もちろん，先生は，無批判に人の言を信ずるわけでなかった．原爆が米国で製造されたとの噂に批判的で，広島へ投下以後も，仲々信じられなかった．今にして思えば，当時長岡半太郎博士を初めとし，日本の科学者の多くが，仁科グループを除き，未だできないと推測していた．したがって先生はこの常識に従っていられたのだろう．これは万有還銀術という羹（アツモノ）に懲りられたためだろうか．また，これに関連して私事を語らして頂く．

終戦直後，中試の研究調査に来たソ連将校が，同位体分離を研究した私を，わが国の原爆研究者と感違いし，危くソ連へ拉致しそうにな

った[5]．幸いにもそうならなかったのは，先生が全力で否定されたため，とか聞いている．

先生にはこのご性格があるので，次§の厳しさがあっても阪大の部応用化学科の創設に成功された，と思われる．というのは，周知のごとく，その際，故鉛市太郎名誉教授が協力されたが，先生から，この同僚との協力内容やその間の苦辛をうかがったからである．このことは，性格の異なるご両人が肝胆あい照らす中であった，との香坂要三郎先生の回想の傍証となろう（『雪つむじ』（1967）非売品，39～41ページ），これは一度信ずれば先生はその人を深く信ずる好例と思われる．

§3．潔癖なご性格

香坂先生（前述）は，"先生がこわい人"と聞き，恐る恐る初対面した．だが，意外にもそうでなかった，と回想していられる．これは先生が不義とか不正に対し，きびしい言行を示される評判のためだった．その厳しさは他人に対してだけでなく，自らに対しても同様だった．

先生が万有還銀術の真相解明のため，羽鳥翁宅に長期滞在する際，工学部長に辞表を提出された事実が，その好例である．それは"羽鳥式試金法研究日誌（大正10年12月上旬—同11年5月下旬）"と題するノートの第1ページに，

≪ 大正10年11月25日付ヲ以テ九州帝国大学工学部長吉町太郎一氏ニ辞表ヲ提出シ地行東町ノ居ヲタヽミ，余ハ単身29日早朝福岡ヲ出発，30日午後3時羽鳥邸ニ入ル≫

で始まる序言で示されている（嗣子廣氏所持）．

この記載から先生が，還銀術にかけられた期待の大きさが推測できると共に，失敗の場合に公務をおろそかにした批判に備えての覚悟が示されている．残念にも結果は最悪で，約2年の後に依願退職されることになった．先生は騙されたのであるから，何も辞職しなくても，という聲もあった．だが公務をおろそかにしたのは事実なので，先生の潔癖さが所信を実行させた，と思える．

つぎに現在では恐らく信じられないような上述の先生の潔癖さを示す逸話を述べる．その第一は姪ごさん（丸沢美千代さん）から，うかがった話である．何か先生と話している内，通学だか通勤の定期券を一日一往復以上使用するとはよくない，といって叱られた，という．恐らく国鉄または電鉄会社との契約違反という意味で，無人駅を利用しての無賃乗車と同じく，その行為を解していられたのだった．第二話は戦前のことだから，戦後派には，さらに理解しにくいかも知れないが．

第一次中試所長時代の頃，中食をとりに繁華街に出かけた所員が先生と会食する機会があった．いざお開きとなり帰所となった折，先生は所長用公用車にその折も所員を同乗させなかった．断わられた同僚某君によると，"この車は天皇陛下から所長にと提供されたものだから"，との理由だった．これから先生の公私混交をさける主義への徹底さが判る．

このような先生だけに，第二次満鉄最高顧問の折には，新京在勤とて関東軍首脳部とは，大変にやりあった．その結果，新京を去ることになったが，帰国よりも大連の中試所長を選ばれた，と聞く．戦後，軍部の独裁的指導方針に批判的意見をうかがったのは，この噂を裏付けるものであろう．

独裁に対する先生の態度は，実は旅順工科大学でN学長との意見対立で示されていた．恐らく今や知る人もないと思われるこの事実は，当時物理学の教授として，共に独裁的営に反対し，続いて北大へ移ったH博士からうかがった．こんな事情により，大阪大学は幸いにも先生をお迎えできたのであろう．

§4．思想の柔軟性

前§をお読みになって，先生は大変に保守的思想をお持ちと感じられるかも知れない．だがどうして，実に柔軟性ある頭脳の持主だった．九大教授時代（大正3～12年）には，自由思想の学者として公的に活躍していられる．この期間は，いわゆる大正デモクラシー期を挾む時期である．その頃の先生の足跡を追うと，戦後の先生の足跡の理解ばかりでなく，万有還銀術にのめりこんだ原因をも理解できる．この観点から，筆者は最近，前述の一文[2]を記したので，詳細はそれにゆずる．

戦後になって，先生がその昔，すでに自由主義・民主主義の思想に接せられたことは，親し

くお話できて知った．その中で，中江兆民とか西川光次郎など明治期に活躍した人の話も出てきた．これと先生の大学卒業が明治40年という点から，大学卒業前後に自由思想に接せられていたのかも知れない．それが戦後の共産主義の理解にもつながったのだろう．

このような思想の持主ではあるが，戦後結成された大連勤労者組合は，旧管理者の一人として組合員としなかった．居留民団の性能を持った組合は，居留民としての資格まではもちろん奪わなかったが．だが，留用者の一人となった昭和22年春からは組合員となられ，帰国まで一員として活躍された．これについては同23年夏に引揚げた筆者ならずとも，ご遺著は大変興味がある．そこで，その間の先生の思想変化を物語る挿話を記るす．これは多分，先生のご帰国を祝って西の宮の某所で催された会で，香坂要三郎名誉教授が話されたものである．前述の『雪つむじ』の35～38ページにも出ているが，同席した筆者は大変感銘したので，ご了承を得て紹介させて頂く．

ご帰国まもなく，香坂さんが先生にお会いしたところ，突然“君にはお詫びすることがある”，といって頭を下げられた．何のことかとびっくりすると，再度びっくり仰天のお話だった．

“阪大在職中，君が学生の一人を大勢の前で叱っていた．そこで君を呼んで，叱るなら他人の居ない場所で叱るべきだと注意した．だが，中共での生活体験で，それは誤っていた，と判った．上の者が下の者を一対一で叱ると，圧がかかり無理強いに成りやすい．やはり多数の人の前で叱る方が正しい．こう判った以上，その昔は君に悪いことを言った．申し訳けなかった”．

これを拝聴した香坂さんは，何しろ30年以上も前のことをご記憶なのに，大変に驚いた．しかもその中には，以来先生の教えにしたがって世に処してきた事実に対するおどろきも含まれていた，という．この先生の考え方の転向の当否はさておき，この話は先生の思想の柔軟性を示し，しかも誤りと判れば，それを正すご性格をも示す好例である．

このように思想が変化された先生は，引揚後亡くなった大山郁夫氏の跡をつぎ，政界に出る決意をＩ氏にもらされていた．だが，健康の点などの事情で，この計画は取り止めになった，と聞いている．

エピローグ

初めて筆者が先生に拝顔したのは，昭和15年春で57歳であられた．すでに大満鉄の理事待遇の中試所長として，立派なご風格に，大人（タイジン）の面影が感じられた．だが，昭和20年に再び所長として来任の折は，わが国が危急存亡の際なので，以前の温和な恵比寿顔は消えていられた．それは当然としても，おしゃれの先生は，その頃でも見事なヒスイのカフスボタンや高価なラッコ帽をお持ちだった．この帽子は温暖なわが国では被る人もないが，赤の広場の冬季行事に，壁上に並ぶソ連の最高首脳らが被る宗匠頭巾風の，あれである．このラッコ帽を題材に，先生の思想の変遷を物語ろう．

終戦後，いつからか存じないが，先生は必要にも迫られてロシヤ語の学修を熱心だった．そのため単語カードを自製し，毎日徒歩通勤の折も，それをめくりめくり記憶されていた．その内に寒くなったので，あのラッコ帽をお被りになった．ところが，ある早朝，途上でショーハイ（中国人少年）に，長い棒で帽子をつつき落とされた．驚きながらもけしからんと彼を睨んだ時には，別の仲間が帽子を拾って逃げていった，という（故Ｙ博士談）．

それから十回近くの寒い冬を，先生は大陸で過ごされた．その間，奪われた高価な帽子の代りにどんなものを使用されたろうか．それは知らない．だが，帰国された先生を京都駅でお迎えした際，被られていたのは毛沢東帽だった．

終りに，資料を頂いた丸沢廣氏に深謝する．

文　　献

1）「科学と実験」（1981）12月号15.
2）「化学史研究」投稿中.
3）両書の主体は，先生の遺著で，これに対する付録が異なる.
4）栗山平補「満鉄会報」51号（1967），11.
5）廣田，「朝日新聞」1983，8・8夕刊．この機会にソ連将校の私への取調べは，先生の室であった，と訂正.